

慣用句の意味を分析する方法

石田 プリシラ

0. はじめに

慣用句の研究では、慣用句の意味をどのように分析するかが重要な課題である。従来は、慣用句の構成要素の意味を検討することや（宮地 1991、伊藤 1997b、1999b）、慣用句の文字通りの意味とその「慣用句としての意味」の関係を考察することが多かった（伊藤 1997a、1999c）。また、認知意味論の観点から行なわれた研究もあり、これらの研究では慣用句の比喩的な意味が生まれる背景には様々な「概念メタファー（conceptual metaphors）」や「概念的写像（conceptual mappings）」が関わっていることを主張している（Gibbs and O'Brien 1990、Kövecses and Szabó1996）。

ところが先行研究の中には、類義の慣用句間の意味的な違いを問題にしているものは見られない。例えば(1a)と(1b)のように、「舌を巻く」と「目を見張る」は両者とも人が意外な目にあってびっくりすることを表わす際に用いられる。

(1a) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには舌を巻くものがあつた。

（『夢の』41）

(1b) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには目を見張るものがあつた。

また、同じような意味は「おどろく」という語によっても表わされる。

(1c) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには驚くものがあつた。

しかしながらこの「舌を巻く」、「目を見張る」、と「おどろく」は全く同じ意味を表わすわけではないと思われる。では、それぞれの語句の意味はどのように分析できるだろうか。そしてこのような類義語句の意味的な違いはどのように明らかにできるだろうか。

本稿の目的は、上の問題を一般意味論と語彙論の枠組みの中に位置づけ、慣用句全体が表わす意味の分析方法を提示することである。慣用句の定義・範囲は先行研究の中でも異なっているが（例えば森田 1966、白石 1977、宮地 1982、榎山 1997 など）、本研究では便宜的に宮地（1982、1985 など）が提唱している慣用句の定義・範囲ののっとり、宮地が慣用句と見なしているものを対象とする¹。このどのようなものを慣用句と

見なすかといった問題はそれ自体慣用句の研究における重要な課題であると考え、上で述べたように本稿の主眼は別の問題にあるので、機会をあらためて論じることとする。なお本稿では、動詞慣用句と一般動詞のみを対象とする²。

1. 先行研究と本稿の立場

慣用句の意味を扱っている研究には、次の三つのアプローチが見られる。

①個々の構成要素の意味を検討するもの

宮地 (1991) や伊藤 (1997b、1999b) は慣用句の構成要素の意味を類例を比較することで明らかにしている。例えば宮地 (1991) は「汗をかく」、「いびきをかく」、「恥をかく」などを比較し、「かく」という動詞が【あるものが体の中から外へ、心身の内面から外面へあらわれる】という意味を表わすとしている³。また、伊藤 (1997b) は Blut / 「血」という名詞を含むドイツ語・日本語の慣用句を比較し、これらの名詞に【血縁関係】、【人間・生物】、【感情 (怒り、興奮など) を表わす器官】などの比喩的意味があると述べている。

②「慣用句としての意味」と「文字通りの意味」の関係を検討するもの

伊藤 (1997a、1999c) は慣用句の意味を「具象性」の観点から考察している。「具象性」とは、構成要素の文字通りの意味によって表わされる事柄である。例えば「足を引っ張る」は「身体部位の自由な動きを封ずる」という具象性を表わしており、この具象性から「物事の進行を妨げる」という慣用句としての意味が生じたと考える (伊藤 1999c)。また、「目を剥く」や *jm. schwilt der Kamm* (文字通りの意味は「鶏冠をふくらます」) などの、怒りを表わす日・独慣用句の意味には、「身体部位の形を変化させる」という具象性が関わっていると述べている (伊藤 1997a)。

③認知意味論の観点から慣用句の意味を検討するもの

Gibbs and O'Brien (1990) や Kövecses and Szabó (1996) は慣用句の意味を Lakoff (1987) の認知意味論の観点から考察している。Gibbs and O'Brien (1990) は *spill the beans* や *let the cat out of the bag* などの慣用句について実験を行ない、複数の母語話者が述べた「心的イメージ (mental images)」に多くの共通点があることを示し、この結果から慣用句の比喩的意味が生まれる背景に様々な「概念メタファー (conceptual metaphors)」が実際に働いていると主張している (例えば *THE MIND IS A CONTAINER* や *SECRETS ARE ENTITIES*)。また、Kövecses and Szabó (1996) は、慣用句の意味が生じる背景には「基点領域 (source domains)」、「存在的写像 (ontological mapping)」及び「認識的写像 (epistemic mapping)」といった三つの要因が関わっており、多くの慣用句の意味に「規則的な動機づけ (systematic motivation)」が認められると述べている。

上のように、慣用句の意味を扱っている研究には様々な観点がある。本稿では先行研究とはやや異なった観点に立ち、慣用句の意味の問題を一般意味論・語彙論の枠組みの中で考察する。まず伊藤（1989、1997b）と村木（1985、1991）をふまえて、慣用句に「語彙性」という特性があると考え⁴。つまり慣用句は「空が青い」、「海が静かだ」、「花をながめる」などの一般連語句⁵とは異なり、使われる度に文法規則などをもとに形成されるものではなく既に完成した統合体として、語と同じように繰り返し再生産されて用いられる。言い換えれば、慣用句は二つ以上の単語の組み合わせであるにもかかわらず、形式的にも意味的にも固定しており、句全体で単語と同じ振る舞いをするのである。このことは、慣用句が一般に単語との交替が可能であることからわかる⁶。

(2) 太郎は花子の博識に {舌を巻いた／驚いた}。

(3) 昨夜のことで太郎はまだ {腹を立てている／怒っている} ようです。

(4) 太郎は次郎の言葉 {に耳を傾けた／を聞いた}。⁷

以上のことを踏まえて本稿では慣用句は単語と対等の語彙単位であると主張する。慣用句の意味分析に関しては、語の数が膨大なことからコセリウ（1982b、1982e など）にのっとり、「語の場（champs lexicaux）⁸」を用いて行なうのが効果的であると考えられる。つまりある一つの語の意味を分析するためには、これを同じ語の場に属する他の語につき合わせ、これらを区別している弁別的意味特徴を一つずつ明らかにしていくのである。例えばドイツ語の《年齢》を表わす形容詞 *jung*（若い）は、*alt*（年とった）や *neu*（新しい）と比較することで〈非・年月を経た〉+〈生物について〉といった特徴に分析できるのである（コセリウ 1982e）。

本稿では、慣用句は単語に対立する要素として「語の場」の中で機能すると見なす。そして慣用句の意味を分析するために、これを（同じ語の場に属する）他の語（すなわち慣用句や単語）と比較し、各表現の弁別的意味特徴を一つずつ抽出していく。以下、語の場の設定方法を示してから（2節）、弁別の特徴を抽出する方法を提示する（3節）。

2. 「語の場」の設定方法

上に述べたように、「語の場」は共通の意味特徴をもつ複数の語から構成されているが、（分析の際に）個々の語の場を設定するためには、まずこういった「共通の意味特徴」とは何かを明らかにしなければならない。本節ではまず、関連している意味を表わすと思われる「舌を巻く」、「目を見張る」、「おどろく」といった動詞慣用句・一般動詞を対象とする。そして以下に述べる「置き換えのテスト」（2.1）と「否定・肯定対比のテスト」（2.2）を利用し、これらの慣用句・動詞の共通の意味特徴を明らかにする。

2.1 置き換えのテスト

このテストでは、一對の語（慣用句のペアあるいは慣用句と動詞からなるペア）を比較する。この両者が、ある文脈（＝文）で置き換えられても、ほぼ同じ事柄を表わすのであれば、両者は意味の面で共通の部分があると考えられる。例えば、次の用例を見てみよう。

- (5) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには {舌を巻く／目を見張る} ものがあった。(＝(1a)、(1b))⁹
- (6) 北がもう一つ {目を見張った／舌を巻いた} のは、呉の測候所の観測記録に関する次のような記述であった。（「目を見張る」＝『空白』391）

(5)と(6)において「舌を巻く」と「目を見張る」は交替可能である。置き換えた文はほぼ同じように人が意外なものやことに直面して驚いたという意味を表わしている¹⁰。このことから、「舌を巻く」と「目を見張る」の意味に共通の部分があること、つまりこの二つに共通の意味特徴があることがわかる。本稿ではこの共通の意味特徴を《驚き》と呼ぶことにする。

次に「舌を巻く」と「おどろく」を見てみよう。この二つはそれぞれ慣用句と単語であるといった違いがあるにもかかわらず、上の「舌を巻く」と「目を見張る」の場合と同様に互いに置き換えられることがある。

- (7) 岩の軽業師の別名に背かず、その天賦のバランスには {舌を巻く／驚く} ものがあった。(＝(1a)、(1c))
- (8) 太郎は花子の博識に {驚いた／舌を巻いた}。(＝(2))

よって「舌を巻く」と「おどろく」の意味に重なる部分がある、つまり両者は《驚き》といった共通の意味特徴を持っていると言えるのである。

ところで、《驚き》という意味特徴は「おどろく」という語に相当するのかもしれない。確かに、この《驚き》は「おどろく」の意味に含まれており、この二つはある種の対応関係にあるとは言えるだろう。しかしこの《驚き》と「おどろく」は本来性質の違うものであると考えなければならない。なぜならば「おどろく」は一つの語であり、日本語という一言語に属するものであるのに対して、《驚き》は筆者が語の意味を記述するために仮定した意味特徴であり、メタ言語に属するものである。そしてこのような言語のレベルのものとメタ言語のレベルのものは原則的に区別される必要があるからである¹¹。なお上の《驚き》がさらにもっと細かい特徴に分解できるかといった問題が残されているが、これは今後の課題とする。

2.2 否定・肯定対比のテスト

このテストでは、一對の語を一つの文中で対比させる。つまり「Aするんじゃなく

て、Bするんだよ」といったフレームを設定し、一方の語(A)を否定表現、もう一方の語(B)を肯定表現にするのである。このフレームをもとに作った文が実際に容認されるのであれば、問題の二つの語が対立関係にあること(つまりこれらの語の意味に何らかの共通部分があるとともに何らかの違いもあること)がわかる(例えば「おじさんはバスの停留所まで歩いたんじゃないくて、走ったんだよ」)。本稿では、このテストで容認されない次のような事例に注目したい。

- * (9) 北は観測記録の記述に舌を巻いたんじゃないくて、目を見張ったんだよ。
- * (10) 太郎は花子の博識に驚いたんじゃないくて、舌を巻いたんだよ。

(9)が容認されないことは、「舌を巻く」の意味と「目を見張る」の意味に共通の部分があることを示唆する。言い換えれば「舌を巻く」を否定しながら「目を見張る」を肯定することができないということから、この両者の意味には重なる部分が多いことがわかるのである。つまりこれらの慣用句は両方とも人が意外な目にあってびっくりすることを表わすのであり、やはり《驚き》という共通の意味特徴を持っているのである。(10)の「おどろく」と「舌を巻く」に関しても同様である。

以上「舌を巻く」、「目を見張る」、「おどろく」が《驚き》という共通の意味特徴を持っていることを明らかにした。このように共通の意味特徴を持つことは、これらの慣用句や動詞が一つの語の場を構成していることを意味する。本稿ではこの語の場を「《驚き》を表わす動詞慣用句・一般動詞」と呼ぶことにする。なお、この語の場には「舌を巻く」などのほかにも様々な慣用句や動詞が属していると思われる(「腰が抜ける」、「目が飛び出る」、「目を白黒させる」、「目を丸くする」、「たまげる」など)。しかしながら本稿の目的は、(この語の場自体を分析することではなく)分析の方法を示すということなので、ここでは少数の語に対象を限定する。その対象を増やしていき、語の場の全容を明らかにするのは、今後の課題とする。

3. 弁別的意味特徴の設定方法

本節では、弁別的意味特徴を抽出するためのテストを提示する¹²。ここでは「《驚き》を表わす動詞慣用句・一般動詞」といった語の場のほかに、次のものも対象とする。

《聴覚活動》を表わす動詞慣用句・一般動詞

「耳を傾ける」、「耳を澄ます」、「聞く」

《取得・所有》を表わす動詞慣用句・一般動詞

「手に入れる」、「手にする」¹³、「得る」

この二つの語の場は2節で示したテストを利用して設定したが、紙幅の制約のためにその詳細は割愛する。なお、これらの語の場の語の限定に関しては2節の結びを参照されたい。

3.1 置き換えのテスト

このテストは、あらかじめ文を設定し、その文の慣用句（または動詞）を他の慣用句（または動詞）に置き換えるものである。このような置き換えが可能な場合は、もとの文と語を置き換えた文の意味がどのように異なっているのかを母語話者に聞き、その違いをもとに問題の語の弁別的意味特徴を仮定する。例えば、「舌を巻く」と「おどろく」を見てみよう。

- (11) 二子山親方が「若手なのに相撲がしっかりしている」といって 舌を巻いた／驚いた。

上のように「舌を巻いた」と「驚いた」は交替可能であり、両方とも人が意外なことに直面してびっくりしたという意味を表わしている。しかし詳しく見ると、次のような違いが認められる。「舌を巻いた」は「驚いた」と違って、称賛の意味を表わす。すなわち「二子山親方」が若手の力士の能力に驚きつつ感心や感服もしていることを表わす。このことから、「舌を巻く」の方には<プラス評価>という意味特徴が含まれていると仮定できる。

また、次の文脈において「手に入れる」を「手にする」に置き換えることができるが、もとの文と置き換えた文の意味が全く同じというわけではない。

- (12) しかし既に紙の値段はあがっているし、なかなか 手に入れる／手にすることができなかった。（「手に入れる」=『真空』211）

上の文において「手に入れる」は主体が対象を自分のものにすることを表わしているのに対して、「手にする」は主体が対象を物理的に移動すること、つまり「紙」を実際に手に持つことを表わしている。このことから、「手に入れる」と「手にする」の区別には<所有の移動>と<物理・空間的移動>といった意味特徴が関わっていると言えようである。

(11)と(12)では一対の語（すなわち語Aと語B）が交代可能な場合を見たが、次に、語Aと語Bが交替可能でない場合に注目したい。本稿では、Aが用いられる文脈（文）でBが用いられないのは、このBには何らかの意味的な制限があるからだと考える。そしてこのような制限には、Bの弁別的意味特徴が関わっていると考える。例えば(13)のように、「手にする」を「手に入れる」に置き換えられない場合がある。

- (13) 背広を取り出し、整理タンスの^{ひきだし}抽出を引いて、クリーニング屋から戻ってきたばかりのワイシャツを 手にした／*手に入れた。（「手にする」=『天使』139）

(13)で「手にする」は主体が対象を実際手に取ることを表わしている。そしてこの文脈では「手に入れる」が容認されない。このことから、「手にする」は物理・空間的な移動を表わすのに対して、「手に入れる」はこれを表わさずに(12)のような所有の移動を表わすことが窺える。そして「手にする」と「手に入れる」の区別にはやはり<物理・空間的移動>と<所有の移動>という弁別の特徴が関わっていることが認められる。

次に「得る」と「手に入れる」を見てみよう。

- (14) 毎日往診していただくように梶田先生の自宅へお願いに行く。承諾を 得る / *手に入れる }。 (『黒い』 501)

上のように、「得る」はごく自然に「承諾」という名詞と共起するのに対して、「手に入れる」はこの名詞と共起しない。このことから、「得る」と「手に入れる」はその行為の対象となるものの性質の違いで区別できると考えられる。つまり、「得る」は抽象物が対象となりやすいのに対して、「手に入れる」は通常(12)のように具体物が対象となると推測できる (『紙／お金／土地／承諾書』を手に入れる)。よって「得る」の方は<抽象性>といった弁別の特徴を持っているのに対して、「手に入れる」は<具体性>を持っていると仮定できるのである。

以上のように、「置き換えのテスト」は非常に生産的なものである。幅広く適用できるし、置き換えが可能な場合にも可能でない場合にも、母語話者の直感を手がかりに弁別の意味特徴をひき出すことができるのである。よって本稿では、慣用語の意味を分析するにはまず置き換えのテストを用いて弁別の特徴を仮定し、次にその仮定した特徴をいくつかの以下に述べるようなテストを用いて検証していくことにする (3.2～3.5)。なお、置き換えのテストのあとにどのようなテストを用いるのかは問題の語や筆者が仮定した意味特徴によって異なってくる。

3.2 「ただ…だけ」のテスト

このテストでは、「ただ…だけ」というフレームを用いて二つの語を一つの文中で対比させる (例えば「Aするというよりも、ただBするだけだよ」や、「Aするんじゃなくて、ただBするだけだよ」)。このフレームをもとに作った文が実際に容認される場合には、語Aの意味に何らかの「 $\pm\alpha$ 」に相当する弁別の特徴が含まれているか、あるいは語Aが何らかの性質について語Bよりも高い度合のものを表わしているかのどちらかであることがわかる (例えば「その言葉が頭に来たんじゃなくて、ただ気になっただけだよ」)。そしてさらにこのような文の解釈をもとにすれば問題の語を区別している意味特徴も明らかにできる。例えば「舌を巻く」と「おどろく」を見てみよう。

(15a) 太郎は花子の博識に舌を巻いたというよりも、ただ驚いただけだよ。

* (15b) 太郎は花子の博識に驚いたというよりも、ただ舌を巻いただけだよ。

(15a)が容認されるのに対し(15b)が容認されないことは、「舌を巻く」の方には何らかの「 $+α$ 」の意味が含まれていることを示唆する。具体的な「 $+α$ 」の意味は容認される文から明らかにできる。(15a)の意味は、太郎にとって花子の博識は意外なものであるが、太郎はその博識を特に称賛してはいない、といったものである。よって「舌を巻く」の方は感心や感服の意味、つまりプラスの評価を表わしていると言える。そこで「舌を巻く」の意味にはやはり3.1で仮定した<プラス評価>が含まれており、この特徴が「舌を巻く」のいわゆる「 $+α$ 」の意味に当たると認められる。

この「ただ…だけ」のテストは「手にする」と「手に入れる」の弁別的特徴を明らかにするためにも有効である。

(16a) (本屋で) 太郎はあの本を手に入れたんじゃなくて、ただ手にしただけだよ。

* (16b) (本屋で) 太郎はあの本を手に入れたんじゃなくて、ただ手に入れただけだよ。

(16a)では、「太郎」が「あの本」を買ったのではなく、それを単に手に取っただけだということが表わされている。つまり「手に入れる」は所有の移動を表わしているのに対して、「手にする」は物理・空間的な移動を表わしていると解釈されるのである。そこでやはり、この二つの語は<所有の移動>と<物理・空間的移動> (3.1) という特徴によって区別できると考えられる。なお(16a)が容認されるのは、「手に入れる」の方には何らかの「 $+α$ 」の意味が含まれているためである。この「 $+α$ 」の意味とは、「手に入れる」の表わす所有が「手にする」の表わす一時的な所有とは異なり永続的であることから、永続性であると思われる。

3.3 最小対立テスト

これは、(a)「太郎は耳を澄ました」と(b)「太郎は耳を傾けた」のような最小対立をなしている文 (minimal-pair sentences) に、置き換えテストによって仮定した意味特徴を含む別の文を後続させ、その容認性を調べるものである。例えば(a)と(b)の文には、「耳を澄ます」と「耳を傾ける」の区別に関わると考えられる意味特徴<結果重視> (後述) を含む、「何も聞こえなかった」という文を後続させる。

(17a) 太郎は耳を澄ましたが、何も聞こえなかった。

△(17b) 太郎は耳を傾けたが、何も聞こえなかった。

(17b)が完全には容認されないのは、「耳を傾けた」と「聞こえなかった」が矛盾していると感じられるからである。このことから、「聞こえなかった」は音が耳に届いてい

ない様子を表わす一方、「耳を傾ける」は音が耳に届いている様子を表わすということがわかる。一方(17a)が容認されることは、「耳を澄ます」の方は音が耳に届いているかどうかということを問題にしないことを示唆する。つまりこの慣用句は音が耳に届いていないという文脈でもごく自然に用いられるので、その意味はあるものを聞こうとして注意を向けるという動作のみを表わすことが窺える。そこで「耳を澄ます」と「耳を傾ける」の区別には、<過程重視>と<結果重視>といった意味特徴が関わっていると見えそうである¹⁴。

(17b)では、接続助詞「が」の前の節と後ろの節が矛盾することによって語の弁別的意味特徴が明らかになったが、接続助詞「と」などを用いて、前の節と後ろの節が余剰的(redundant)となるかによっても弁別の特徴を明らかにできる。

(18a) 耳をすますと、ドアの内がわで、かすかに音楽が聞こえた。(『脅迫』250)

△(18b) 耳を傾けると、ドアの内がわで、かすかに音楽が聞こえた。

(18)において「と」は二つの別の動作がつついて起こることを表わす。(18a)が容認されることは、「耳を澄ます」と「聞こえる」が別個の動作を表わすことを示唆する。すなわち、「聞こえた」は音楽が実際耳に届いたということを、「耳を澄ます」はそれに先立って行なわれた動作、つまり聞こうと注意を向けたという動作を表わしていると解釈される。一方、(18b)は(18a)に比べて容認性が落ちているが、これは前の節と後ろの節が余剰的である、つまり「耳を傾ける」の意味と「聞こえる」の意味が重なっていると感じられるからである。すなわち「耳を傾ける」は「聞こえる」と同様に、音が実際耳に届いている様子を表わすと考えられるのである。以上のことから、「耳を澄ます」と「耳を傾ける」の区別にはやはり<過程重視>と<結果重視>という弁別の特徴が関わっていると思われる。

「最小対立テスト」は「手にする」と「手に入れる」の弁別の特徴を明らかにするためにも利用できる。

(19a) 古本屋でその小説を手にしてばらばらめくったが、結局買わなかったんだ。

* (19b) 古本屋でその小説を手に入れてばらばらめくったが、結局買わなかったんだ。

(20a) 古本屋でその小説を手にして、ばらばらと見てから買ったんだ。

* (20b) 古本屋でその小説を手に入れて、ばらばらと見てから買ったんだ。

ここでは後の節の「買った」と「買わなかった」に注目したい。「買う」は「お金を払って自分のものにする」こと、つまり所有権の移動を表わし、「買わなかった」は逆に所有権の移動がないことを表わす。(19b)が容認されないのは、前の節と後の節が矛盾している(つまり「手に入れて」と「買わなかった」の意味が衝突している)と感じられるからである。このことから「買わなかった」には<—所有の移動>が含まれてい

のに対して、「手に入れる」には<十所有の移動>が含まれていることがわかる。また、(20b)が容認されないのは、前の節と後の節が余剰的 (redundant) であると感じられるからであり、これは「手に入れる」と「買った」が両方とも<十所有の移動>を含んでいることを示す。

一方、(19a)と(20a)が容認されるのは、「手にする」が所有の移動ではなく、単なる物理・空間的な移動だけを表わしていることを示している (<物理・空間的移動>)。よって(19a)と(20a)において、「手にする」は<十所有の移動>を含む「買った」とも、<一所有の移動>を含む「買わなかった」とも、問題なく共起するのである。

3.4 副詞(句)との共起のテスト

このテストは、まず問題の語について何らかの意味特徴を仮定し、その意味特徴を含む副詞(句)¹⁵と問題の語との共起可能性を調べるものである。例えば、「耳を傾げる」と「聞く」は<意図性>の面で異なっていると仮定できる。なぜならば、「聞く」は主体の意図が関与しない行為を表わすのに用いられるのに対し、「耳を傾げる」はそのような場合に用いることができないからである。

(21) 「それでふじ子さんの婚約の話 {を聞いた／*に耳を傾けた} 時は、とても淋しかった。」(「聞く」=『塩狩』446)

そしてこの<意図性>という弁別的特徴の有無を検証するために、「聞く」と「耳を傾げる」が「たまたま」と「じっと」という副詞と共起するかどうかをテストする。

(22a) (親睦会で) たまたま^{ふるさと}故郷の話を聞いて急に懐かしくなった。

* (22b) (親睦会で) たまたま^{ふるさと}故郷の話に耳を傾けて急に懐かしくなった。

(23) 「おかあさま、人間て小さい時にいい子でも、大きくなって、そんなふうに変わるものでしょうか」

さっきから二人の話 {をじっと聞いて／にじっと耳を傾けて} いる母に、信夫はそうたずねた。(『塩狩』278)

「たまたま」(22)は<一意図性>という意味特徴を含むと考えられるため、主体の意志と関わりのない動作や出来事を表わす動詞(句)と共起すると推測できる。(22a)が容認されることから、「聞く」が非意図的な動作を表わすことがわかる。一方、(22b)が容認されないことから、「耳を傾げる」が非意図的な動作を表わさないこと、つまり<十意図性>を含むことがわかる。

また、(23)に見られる「じっと」は<十意図性>という意味特徴を含むと考えられるため、主体の意志によって制御できる動作を表わす動詞(句)と共起すると推測できる。(23)のように「じっと聞いている」と「じっと耳を傾けている」が両方とも容認さ

れることから、「聞く」と「耳を傾ける」は両方とも意図的な動作を表わすことがわかる。さらに(22)と(23)から、「耳を傾ける」は<+意図性>であるのに対して、「聞く」は<意図性>に関してニュートラルである (<±意図性>) ことがわかる。

3.5 その他のテスト

弁別的意味特徴を抽出する際には、3.1-3.4に挙げたテストのほかにも、いくつかのテストが考えられる。例えば、二つの語が<意図性>の面で対立していると仮定した場合には、これらの語が命令表現や意志表現になるかどうかを調べることによってこの特徴の有無を検証できる(「命令・意志表現化のテスト」)。例えば「耳を傾ける」と「耳にする」を見てみよう。

(24) しかし山田少佐は神田大尉の言 {に耳を傾けよう/*を耳にしよう} とはしなかった。(「耳を傾ける」=『八甲』)

(25) 先生の言うこと {に耳を傾けなさい/*を耳にしなさい} よ。

上のように「耳を傾ける」が命令・意志表現になることは、この慣用句の表わす動作に主体の意図性が働いていること、つまりこの慣用句が<+意図性>を含んでいることを示す。一方、「耳にする」が命令・意志表現にならないことは、この慣用句が主体の意志と関わりのない動作・出来事を表わすこと、つまり<-意図性>を含むことを意味するのである。

なお、本稿で提示したテスト以外に有効なものがないとは言えないが、本節で示してきたように、これらのテストは慣用句の弁別的意味特徴を明らかにするために有力なものであると言える。

4. 今後の課題

本稿では、慣用句の意味の問題を一般意味論・語彙論の枠組みの中に位置づけ、慣用句全体が表わす意味の分析方法を提示した。この方法に関してはいくつかの課題が残されているが、そのうち以下2、3点に触れて本稿を結ぶ。

- 1) 本稿では分析方法を問題とし、提示したテストについてはいくつかの例を挙げて説明するにとどめておいた。今後は、本稿で提示した方法を用いて実際に慣用句を分析し、慣用句の意味をいくつかの弁別の特徴に分解する必要がある。
- 2) 慣用句の意味と単語の意味に相違があるかどうかを検討することが必要である。例えば、Nida (1975: 165) は慣用句の意味は単語の意味に比べてより「複雑で特定の (complex and specific)」と述べているが、この主張を裏付ける証拠を示していない。この主張を検討する際にも本稿で提示した方法が有力であると考えられる。
- 3) 本稿で提示した方法は日本語と諸言語の慣用句の対照分析にも用いられる。例え

ば日本語と英語では、「《怒り／anger》を表わす動詞慣用句・一般動詞」といった次のような語の場が設定できる。

(日本語)「頭に来る」、「目を剥く」、「腹が立つ／腹を立てる」、「おこる」、「むかつく」…

(英語) hit the ceiling, blow one's stack, foam at the mouth, bite someone's head off…

このような日・英語の語の場をそれぞれ分析してから、さらにその二つの比較を行ない、それぞれの弁別の特徴や、また日・英語の語句そのもの間に対応関係が認められるかを検討・記述できると思われる。

以上のような課題について、今後とりくんでいくこととしたい。

【注】

- 1) 宮地 (1982: 238) によれば慣用句とは、「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」のことである (例えば「愚痴をこぼす」、「電話をかける」、「頭に来る」、「腹が黒い」、「あとの祭り」など)。なお慣用句の形式・統語・意味的な特性の詳細については、石田 (1998, 1999, 2000) を参照されたい。
- 2) 動詞慣用句とは、「舌を巻く」や「手に入れる」など、「名詞十格助詞十動詞」といった構造を持つものである (宮地 1982, 森田 1985)。また本稿で言う「一般動詞」とは「おどろく」や「得る」などの (単語と見なせる) 動詞のことである。名詞にサ変動詞「する」が複合したものとその他の複合動詞については (「驚嘆する」や「びっくりする」など)、これも慣用句や一般動詞とともに「語の場」を形成しており (1 節を参照)、本稿で提示する分析方法の対象となると思われるが、本稿では少数の語から分析を始めることとし、取りあえず慣用句と一般動詞を対象を限定する。なお、本稿では身体語彙を含む慣用句を対象とするが、ここで提示する方法は身体語彙を含むものに限らず、他の様々な慣用句の意味を分析するためにも用いられると考える。
- 3) 本稿では慣用句の構成要素の (比喩的な) 意味は【】で示し、慣用句の「具象性」(後述) は〔〕で示す。また、共通の意味特徴は《》で示し、弁別の意味特徴は<>で示す (後述)。
- 4) 本稿で言う「語彙性」は伊藤 (1989, 1997b) の「Reproduzierbarkeit (再生産性)」と村木 (1985, 1991) の「単語性」や「既製品性」にほぼ対応するものである。なお伊藤 (1997b: 261) によれば、「Reproduzierbarkeit (再生産性)」は「Lexikalisiertheit (語彙性)」と呼ばれることもある。本稿では慣用句の意味の問題を語彙論の枠組みの中で扱うので、「語彙性」という用語を用いることにする。
- 5) 「一般連語句」とは二語 (以上) が意味関係の許すかぎり自由に結合してできる句のことである (宮地 1985, 1991)。
- 6) 慣用句の中には、単語との置き換えが難しい、あるいは置き換え不可能なものがある (例えば「手を打つ」や「手を回す」)。しかしこのようなものも (2~4) に挙げた慣用句と同様に形式・意味的に固定しており、「語彙性」という特性があると認められる。なおこのようなものの中には、一般動詞との置き換えが難しい (不可能) とも言え、複合動詞なら置き換えが可能なものがある (例えば「手を打つ」↔「折り合う」／「妥協する」や「手を回す」↔「根回しする」／「工作する」)。 (複合動詞に関しては注 2 を参照されたい)。
- 7) (4) のように、「耳を傾ける」は二格名詞をとるのに対して、「聞く」はヲ格名詞をとる。従って「耳を傾ける」と「聞く」の交替には構文的な変化が必然的に伴う。しかし本稿では、「太郎は次郎の言葉に耳を傾けた」と「太郎は次郎の言葉を聞いた」とはほとんど同じ事柄を表わしていると見なし、「耳を傾ける」と「聞く」は、構文的な違いにもかかわらず、交替可能であると認める。この点に関しては国立国語研究所 (1972: 180) を参照されたい。
- 8) 「語の場」とは、「共通の意味領域を分かち合い、しかも互いに直接対立している複数個の語から構

成される系合構造 (structure paradigmatique)」のことである (コセリウ 1982d : 172)。(structure paradigmatique は「系列構造」と訳されることが多いが、ここでは訳文のまま引用する。)

- 9) 本稿では、用例に記されている容認性の判定は筆者が複数の母語話者に行なった調査の結果に基づいている。

記号なし＝問題なく言える。普通に言える。

△＝可能かもしれないが、普通は言わない。

※母語話者間でゆれがあったものも「△」で示す。

*＝言わない。言えない。

- 10) ただしこの二つの慣用句には意味の違いが認められる。例えば(6)の「目を見張った」は「記述」そのもの(記述の内容やその詳細さなど)に対する驚きを表わしているのに対して、「舌を巻いた」は(優れた記述をした)書き手の能力に対する驚きを表わしていると理解される。(5)に関しても同様である。
- 11) この点に関しては Lyons (1977 : 318ff., 334 ff.) を参照されたい。
- 12) 弁別の特徴を抽出するためのテストに関しては、本稿は Bendix (1966) や Nida (1975) に負うところが多い。なお本稿で提示するテストには、従来の語彙・意味分析で用いられてきたものが多いが、本稿ではこのようなテストが慣用句の場合にも適用できることを示していく。
- 13) 「手にする」は物理・空間的移動を表わすことが多いが(3.1を参照)、所有の移動を表わす場合もある(例えば「暗号表を手にしたロシア側ではアンセルの手を借りることなく解読作業をおこなっていた…」(『ポーツ』116))。よって本稿ではこの慣用句は「取得・所有」を表わす動詞慣用句・一般動詞」という語の場に属すると見なす。
- 14) <過程重視>と<結果重視>という意味特徴のラベリングに関しては再検討の余地があるが、それは今後の課題とする。
- 15) 本稿では「副詞(句)」とは、副詞(「たまたま～」など)、様子や様態を表わす動詞の「～テ形」を含む句(「命をかけて～」など)、また様子や手段を表わす「<体言>」を含む句(「必死の思いで」)などのことである。

【参考文献】

- 石田プリシラ 1998 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5 : 43-56. 筑波大学文芸・言語研究科 応用言語学コース
- 1999 「動詞慣用句の慣用性の度合—統語的固定性を目安として—」『筑波応用言語学研究』6 : 69-83. 筑波大学文芸・言語研究科 応用言語学コース
- 2000 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7 : 24-43. 国立国語研究所
- 2002 『日本語慣用句の研究—慣用句の特性と意味を中心に—』筑波大学大学院文芸・言語研究科 博士論文(未公開)
- 伊藤 眞 1989 「Phraseologie をめぐる諸問題」『福岡大学人文論叢』第21巻第1号 : 385-411.
- 1997a 「日独慣用句の具象性と意味機能」『Rhodus』13号 : 118-130. 筑波ドイツ文学会
- 1997b 「言語の具象性・比喩性・受動性—日・独慣用句をめぐって—」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』 : 249-297. 三修社
- 1999a 「慣用句の意味の成立要因について」『Rhodus』15号 : 185-197. 筑波ドイツ文学会
- 1999b 「構成要素の比喩的意味について—日独慣用句の身体部位を中心に—」『東西言語文化の類型論』 : 763-788. 筑波大学 特別プロジェクト研究 研究報告書 II
- 1999c 「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』第51号 : 95-117. 筑波大学 現代語・現代文化学系
- 国立国語研究所 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版
- コセリウ E. 宮坂豊夫・西村牧夫・南館英孝訳 1982a 『構造的意味論』(コセリウ言語学選集第1巻) 三修社
- 西村牧夫訳 1982b 「通時構造意味論のために」コセリウ 1982a 所収

- 南館英孝訳 1982c 「語彙の構造的・研究への序章」 コセリウ 1982a 所収
- 西村牧夫訳 1982d 「語彙素構造」 コセリウ 1982a 所収
- 宮坂豊夫訳 1982e 「語彙の機能的考察」 コセリウ 1982a 所収
- 白石大二 1977 「解説 国語慣用句とその研究のもたらすもの」『国語慣用句大辞典』: 525-593, 東京堂出版
- 宮地 裕 1982 「慣用句解説」『慣用句の意味と用法』: 237-265, 明治書院
- 1985 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』1月号: 62-75, 明治書院
- 1991 「慣用句の意味」『ことば』シリーズ 34 言葉の意味』: 65-76, 文化庁
- 村木新次郎 1985 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』1月号: 15-27, 明治書院
- 1991 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 棚山洋介 1997 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第 80 号: 29-43.
- 森田良行 1966 「慣用的な言い方」『講座日本語教育』2: 61-78, 早稲田大学語学教育研究所
- 1985 「動詞慣用句」『日本語学』1月号: 37-44, 明治書院
- Bendix, Edward Herman. 1966. *Componential Analysis of General Vocabulary: The Semantic Structure of a Set of Verbs in English, Hindi, and Japanese*. Bloomington: Indiana University.
- Coseriu, Eugenio and Horst Geckeler. 1981. *Trends in Structural Semantics*. Tübingen: Narr.
- Gibbs, Raymond W. Psycholinguistic studies on the conceptual basis of idiomaticity. *Cognitive Linguistics* 1(4). 417-451.
- and Jennifer E. O'Brien. 1990. Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning. *Cognition* 36. 35-68.
- Kövecses, Zoltán and Péter Szabó. 1996. Idioms: A View from Cognitive Semantics. *Applied Linguistics* 17/3: 326-355.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics* (Vol. I). Cambridge University Press.
- Nida, Eugene A. 1975. *Componential Analysis of Meaning: An Introduction to Semantic Structures*. The Hague: Mouton Publishers.

【用例出典】

『脅迫』=都筑道夫『脅迫者よろしく』/『空白』=柳田邦男『空白の天気図』/『真空』=野間 宏『真空地帯』/『天使』=高橋三千綱『天使を誘惑』/『八甲』=新田次郎『八甲田山死の彷徨』/『ブーツ』=吉村昭『ブーツマスの旗』/『夢の』=森村誠一『夢の虐殺』

※以上のものは、宮地裕編（1985）『日本語慣用句用例集』（大阪大学文学部）からの引用。

『塩狩』=三浦綾子『塩狩峠』/『黒い』=井伏鱒二『黒い雨』

※以上のものは、『新潮文庫の100冊』（CD-ROM版・1995）からの引用。

※出典が示されていないものは作例である。

【付記】

本稿は、石田（2002）の一部（「第5章 慣用句の意味分析（1）—分析方法を中心に—」）を加筆・修正したものである。執筆にあたっては、筑波大学の高田誠先生、湯沢賢幸先生、坪井美樹先生、岡崎敏雄先生、伊藤眞先生より貴重なご指摘・ご教示をいただいた。また、日本語チェックにあたっては杉山桂子さんに大変お世話になった。ここに記して感謝を申し上げる。

（いしだ プリシラ 筑波大学日本語・日本文化学類 外国人教師）